

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

旭川医科大学研究フォーラム (2016.3) 16:96-98.

第119回日本眼科学会総会を終えて

石子 智士

学界の動向

第119回日本眼科学会総会を終えて

石 子 智 士*

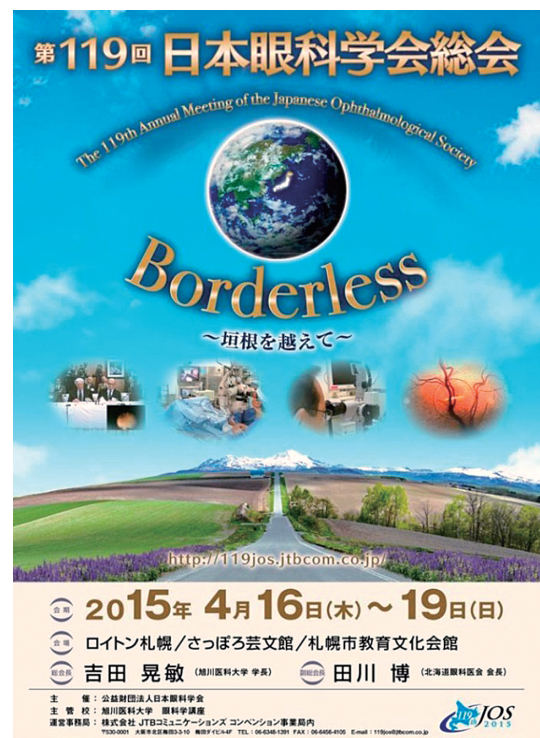
第119回日本眼科学会総会を旭川医科大学学長吉田晃敏総会長のもと旭川医科大学眼科学教室の担当で、平成27年4月16日(木)から19日(日)の4日間、札幌市においてロイトン札幌、さっぽろ文芸館、札幌市教育文化会館の3会場を使い開催致しました。北海道での開催ということもあり参加者の減少が危惧されていましたが、最終的に合計4,500名と盛会のうちに終了致しました。

学会のメインテーマは、「ボーダレス～垣根を越えて～」でした。さまざまな叡智がボーダレスに融合し、垣根を越えて、私たち眼科医がさらなる進化を遂げていければとの思いを託したものでした。ポスターは、目の形になるように学会名とメインタイトルを並べ、瞳の位置に日本が中心となる地球を配置しました。下方には、雪を冠した大雪山に続く一本道と、その両脇には北海道らしいラベンダー、大地は緩やかに湾曲して広大な地球の一部であることを示しています。その間には、スケペンス眼研究所との遠隔医療、吉田先生の手術、石子の外来、そして、基礎研究のイメージを配置し、これらがボーダレスに融合していくイメージを作り上げました。

日眼総会のプログラムは、各専門分野の関連学会から選出されたプログラム委員が中心となって立案と企画・構成を行う事になっていますが、シンポジウムなど学会のメインである学術講演も、このテーマに沿ったものが多く企画されました。特別講演2名、招待講演2名、評議員指名講演3名、シンポジウム20テーマ、教育セミナー10テーマ、スキルトランスファー2セッション、サブスペシャリティサンデー12セッションと幅広い分野で講演が行われました。

特別講演1は、吉村長久教授(京都大学)による「日本人の加齢黄斑変性」で、日本人の加齢黄斑変性の特徴をコホート研究、最新の検査機器を用いた研究、そして遺伝子研究まで、幅広い観点からの講演でした。特別講演2は、飯島裕幸教授(山梨大学)による「ハンフリー視野計で見る網膜疾患」で、この装置を用いた長年に亘る研究から種々の網膜疾患への有用性とその病態について講演しました。

今回の招待講演1は眼炎症・感染関連学会プログラム委員推薦のJames T. Rosenbaum教授(Oregon Health & Science University)によるDoes the microbiome cause uveitis?と題した、HLA B27によるぶどう膜炎に関する



*旭川医科大学 医工連携総研講座

る講演でした。

招待講演2は会長の推薦枠で、吉田学長の Schepens 眼研究所留学時代の友人で、現在眼科雑誌 Retina の Chief Editor をされている Alexander J. Brucker 教授



(University of Pennsylvania, Perelman School of Medicine) に、Clinical Trials for dry age-related macular degenerations. と題し、萎縮型加齢黄斑変性に関する講演をしていただきました。

評議員会指名講演は「次世代の眼科治療」の題目で、iPs 細胞の眼科臨床応用で注目が集まっている高橋政代先生 (理化学研究所) の「iPs 細胞による網膜細胞治療」、西田幸二教授 (大阪大学) の「角膜疾患に対する未来医療」、白井智彦講師 (東京大学) の角膜の透明性を守るために」という演題で、再生医療を中心に講演いただきました。

シンポジウムのうち、会長枠として、旭川医大眼科の特色である、「眼循環」、「遠隔医療」、「近視」、「画像



解析」の4つを企画しました。教室の長岡泰司准教授が眼循環のシンポジウム「眼微小循環研究の最前線ー基礎から臨床へー」で「網膜循環研究の最前線」と題

した講演を行いました。

石子は、遠隔医療のシンポジウム「眼科遠隔医療の



今後の在り方」で「旭川医大が行う眼科遠隔医療の取り組み」、近視のシンポジウム「近視のボーダレスアプローチ」で「強度近視とロービジョン」と題した2つ



の講演を行いました。

これに加えプログラム委員企画のシンポジウムで、教室の高橋淳士先生が「OCT を用いた網膜硝子体界面の評価」と題した講演を行いました。





また、吉田学長はシンポジウム「眼光学と検査機器の進歩」、廣川博之教授はシンポジウム「眼科遠隔医療の今後の在り方」のオーガナイザーをそれぞれ担当しました。

さらに、これまでの日本眼科学会による国際化推進の流れを踏襲し、Best of AAO (American Academy of Ophthalmology) 7セッション、International Symposium 4セッションも行いました。海外からの演者に対しトラベルグラントを12名に支給し、最終的に合計45名の海外演者を招待しました。ランチョンやモーニングなど共催セミナーも合計53セミナーに上りました。

一般演題には、海外からの20演題を含め650もの演題応募があり、これは国際眼科学会と同時開催された昨年を除き過去最大の応募数でした。最終的に一般講演は61セッション329演題、学術展示は51セッシ

ョン295演題としました。このため、当初予定していた会場では間に合わず、学術展示発表の形式を変更せざるを得ませんでした。

学会最終日の市民公開講座は「失明につながる二大疾患」のテーマで、2300名を収容できるニトリ文化ホールにて、山下英俊教授(山形大)の「糖尿病で失明しないために」と、山本哲也教授の(岐阜大)「失明原因第1位 緑内障 -失明する人しない人-」の2つの講演を行いました。この市民公開講座は、地元の北海道眼科医会ならびに札幌市眼科医会のみならず、日本眼科学会総会としては初めて日本眼科医会にも共催していただきました。本総会のメインテーマにあるように、眼科学会と眼科医会の垣根を越えての取り組みを象徴しているものだと思います。

さて、眼科の領域においては、旧帝国大学でもなく、歴史の浅い新設医大が、解剖学学会について日本で最も歴史の長い日本眼科学会総会を担当するという事は異例中の異例です。そのような伝統ある学会を主催するにあたり、吉田学長の意向どおり、総会の準備・運営を、旭川医科大学眼科医局員が一丸となって「おもてなし」の心で作ることができたと思います。参加していただいた会員の皆様からも、いろいろお褒めの言葉を頂き、医局員一同、大変うれしく思っています。

最期に、本総会の開催にあたり、皆様からの暖かいご支援、ご協力に心から感謝申し上げます。

